中山道と草津宿 ～草津を通った女性たち

草津宿街道交流館
専門員　八杉　淳

中山道成立と草津宿

2002年は、徳川家康の中山道伝馬制の施行から400年目にあたります。中山道の原型は、古代・中世の東山道にさかのぼり、近世中山道は、徳川家康が関ヶ原合戦に勝利を収めた翌慶長６年（1601）に関東領国の江戸～小田原（小田原市）間の東海道を京都まで延長、これに続いて翌７年に江戸～松井田（群馬県松井田町）間の中山道を草津まで延長し、東海道に連結させたときをもってその淵源としています。このことは、慶長７年（1602）中山道御嵩宿（岐阜県御嵩町）に下された伝馬朱印状によって確認でき、近江でも同年６月２日付けで徳川家康の奉行であった伊奈忠次ら４名が高宮宿（彦根市）に宛てて下した伝馬定書が残っています。その後、中山道は江戸と京都、大坂と結ぶ大動脈として整備され、東海道に次ぐ主要交通路としての位置を確立していきました。

ちなみに、中山道の表記は、近世初期には「東山道」や「中仙道」と表記されることもあり、新井白石の進言によって、正徳６年（1716）「東山道の内の中筋の道に故に、古来より中山道と申す事に候」（『御触書寛保集成』）と規定し、公的に「中山道」と統一しました。しかしながら、その後も「中山道」「中仙道」の表記は混用されることが多かったようです。さらには、中山道が木曽を抜けることから、「木曽路」、「木曽街道」とも呼ばれることがあり、宝暦６年（1756）に刊行された、中山道筋の道中記「岐蘇路安見絵図」や明和２年（1765）刊行の東海道・中山道両道を扱った「東海木曾両道中懐図鑑」など、中山道ルートを木曽路として紹介しています。

つぎに、中山道の起点・終点の問題ですが、起点が江戸日本橋、終点が草津まで、その里程は129里10町８間（約508km）、宿次は板橋宿（東京都板橋区）から守山宿まで67次と『五駅便覧』は記しています。しかし、渓斎英泉・歌川広重の描く「木曾海道六拾九次」では、江戸日本橋、板橋宿から守山宿までに加え、草津宿、大津宿を描いていることから、一般に中山道が69次と意識されることも多かったようです。

木曽街道六拾九次・草津（草津市蔵中神コレクション）

中山道の通行は、京都

から江戸の将軍家へ嫁ぐ姫宮が多く通行したルートでした。それは、東海道が参勤大名の通行が多いこととともに、東海道に「今切の渡し」(新居～舞阪宿間)、薩埵峠など「今切れる」「去った」と音を忌むことから、わざわざ中山道ルートを用いたといわれています。

和宮の通行と中山道

草津宿には、何人かの姫宮が江戸へと下っていった記録があります。享保16年（1731)、京都伏見家の比宮と、九代将軍家重との縁組が整い、江戸へ向かう途中、田中九蔵本陣で宿泊しています。九蔵本陣では、宿泊のため同年３月22日から普請にかかり、その準備に追われました。比宮は４月22日に京都を出立、大津での休憩を経て草津で宿泊をしています。

寛延９年（1749）には、京都閑院宮家の五十宮が十代将軍家治のもとへと嫁いでいます。草津宿では九蔵本陣で宿泊。この年、正月25日には本陣奉行堤平右衛門が草津宿へ入り、翌日から本陣が修復に取り掛かるため、御大名様の宿泊の申し付けがあっても断るようにと触れられています。このほか、文化元年（1804）京都有栖宮家楽宮が十二代将軍家慶への輿入れのため、９月２日に草津宿で宿泊。また、天保２年（1831）８月25日、京都鷹司家より十三代家定の元へ嫁ぐ有宮が草津で泊っています。

嘉永２年（1849）９月14日、京都一条家より十三代将軍家定の継室に入った寿明宮が草津で泊まりました。彼女の下向に際して草津での準備を見ると、もともと九蔵本陣で宿泊の予定であったものが、急きょ七左衛門本陣に変更になっています。通行１ヵ月前の８月24日、「御老女姉小路様、村瀬様以下十五人」が本陣に入り、28日には道橋見分御普請役松山良之助、渡辺常之助ら４人が小休み。９月１日には同じく道橋見分大目付鈴木半右衛門ら８人のお休みがあり、馬１疋の支度が命じられています。さらに、翌２日、６日、13日にも準備のための通行の休憩や宿泊があり、14日には寿明宮の下向を迎えました。

そして、中山道の最大の通行であったのが和宮の通行でした。

江戸時代の終わり、公武合体政策のもと、十四代将軍徳川家茂のもとへと嫁いだひとりの女性がいます。仁孝天皇の皇女で、孝明天皇の妹、和宮です。

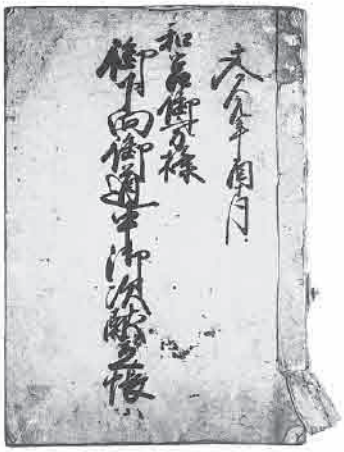
和宮が家茂のもとへ嫁ぐため、行列が京都を出発したのは文久元年（1861）のことです。警護のものも含めるとその人数は3,000から4,000人にものぼっています。一行が草津宿を通ったのは文久元10月22日。田中七左衛門本陣で昼食をとりました。

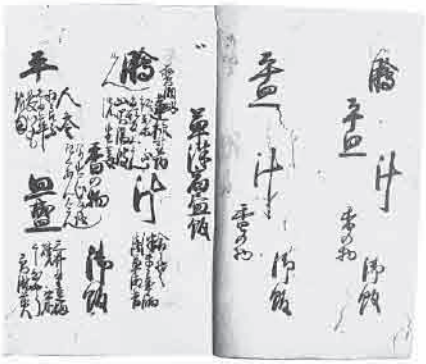
和宮の通行に際しては、文久元年の正月以来、宿場へ次から次へと達書が下され、準備が進められました。中山道の各宿では、本陣や旅籠屋の普請が「姫普請」などといって、その大変な様子が今に語り継がれています。大久手宿（現岐阜県瑞浪市）では、もともと30、40軒の小宿でしたが、和宮が通るということで、急きょ150軒もの「にわか宿屋」が造られたといわれています。ここ草津宿でも、休憩だけでしたが、１年も前から予約が入り、通行の10ヵ月もまえの正月に準備がはじまりました。正月11日、御留守居役阿部伊賀守一行14名が泊っています。その後、24日から３月10日まで、「御奉行御大工頭領」の指揮により、準備の普請が行われました。上段の間は御座所の修理とともに、襖や建具などの取り替え、畳も万端整い、休憩前に入れるのみでした。湯殿も修復されました。

その後も、幕府の普請奉行や道橋見分の役人が次々と草津へ入り、通行の日が近づくにつれてお迎えの大奥や、お付の女中衆の休泊など慌しさを増してきました。

また、当日の料理についても準備が進められ、事前に食材で準備できるものの問い合わせがありました。大津宿から板橋宿までの各宿に対して「御料理物宿々有無書上達書」の

提出が命じられ、各宿では準備できる食材を書き上げて提出しました。草津宿でも例にもれず海魚類・川魚類・鳥類など、準備可能な材料を書き上げています(黒羽兵治郎家文書)。それによると、海魚類は、鯛、鱧、焼鯛、生鰤、鯣、蛸などは当宿にはなく、伏見、大津と送り荷で調達できるが、時節により準備ができないこともあると記されています。川魚類では鯉、鰻、鳥類は玉子のみでほかにはない。さらに豆腐、こんにゃく、小麦、蕎麦は宿で調い、干物、青物などは少しずつ準備するというものです。とりわけ海魚類の手だてには苦心したようです。しかし、これは食材を書き上げたのみで、和宮が食した料理として再現できるものではありませんでしたが、「和宮御方様御下向御道中御次献立帳」(西村幹夫氏蔵)によって和宮の道中全行程における食事の献立が明らかになりました。





文久元年
和宮御方様　御下向御道中御次献立帳

和宮の草津宿通行は10月22日で、田中七左衛門本陣において昼食をとっています。その時の献立は、一汁四菜で次のように記されています。

膾・わん(煎酒酢)	蓮根□切・紅葉ふ・白髪大こん・山吹湯波・洗生姜
汁	合ミそ・つまミ□・浅草海苔
平	人参・相良ふ・しゐ茸・長いも・銀南
皿盛	三井寺豆腐・焼栗・干ひやう(み淋煎)
香の物	なすびなら漬・たくあん大こん
御飯	

草津宿での和宮昼食(再現)

豪華絢爛、華やかな食膳を誰もが思いおこしますが、この献立から再現する料理は、決してそうではありませんでした。このほか、和宮が道中もって歩いた菓子類などの資料も最近確認されています。

通行に際しては、心得方が示されました。正月21日に西川敬蔵より東海道筋大江村(現大津市)から笠川村(現栗東市)までの道造りについての達しがありました。幅9尺(2.7m)、高さ1尺(約30cm)の置き土をして道の整備にあたるようにとの指示です。また10月11日には、伊藤官右衛門から草津宿京側入口より笠川村までの間、街道筋の取り繕いとともに、腰板への落書きなどがないよう十分留意することが申し渡されました。このほか、並木の手入れで、街道筋の並木は通行の際に日笠に差し障りがないようにすることや、通

絲毛御車行列并御役人附（草津市蔵）

行当日には関係者以外、人払いすることなども触れられています。とりわけ、人足方の扱いについては、供揃えは十分に行列の意味をわきまえた者であるが、人足については金目当てであることから、随分苦労があったようです。人足の数は、前々日、前日、当日、翌日の４日間で約14,000人を数えました。人足小屋4,000坪、10月22日は今の暦で11月の末にあたるため、４坪に１ヵ所焚き火が準備されました。馬の水飼桶は10疋に１つで、約200個、飯米は１人７合５尺で120石。行列の休憩中に待機するための敷き莚は１人に１枚の割で16,000枚が準備されたといわれています。

さて、このときは盛大なセレモニーの「和宮降嫁」ですが、元号が改まり明治になった７年（1874）６月、彼女は再び京都を発ち、江戸から名をかえた東京へと向かいました。そして、同月24日、彼女の乗った御輿は草津宿田中七左衛門本陣で小休しています。このとき、田中七左衛門本陣の「大福帳」に記された名は「静寛院宮」。和宮の出家後の名前です。一行は御輿の担ぎ手10人を含めて16人といった小人数で、本陣に下された金子は300両でした。文久の輿入れの大行列と比べれば余りにも寂しい行列です。

慶応２年（1866）、家茂が死去。文久の和宮降嫁の大行列が江戸へ向かった４年後のことでした。彼女は21歳、出家し静寛院宮と名乗りました。家茂の死後も江戸にとどまった静寛院宮は、鳥羽・伏見の戦の後、徳川家の人間として朝廷に対し新政府の江戸攻撃の中止や、徳川家に対する寛大な措置を求め、嘆願の書を送ったり、人を遣わしたりしています。元号が改まり、明治２年、彼女は京都に安住の地を求め里帰りし、心の安らぎを得たのか東京へは出向こうとせず、家茂の７回忌の法要にも侍女を代参させる有様でした。再三の徳川家からの呼びかけで、ようやく江戸へ向かったのは明治７年のこと。文久の大行列とは一変し、静かな行列が草津を訪れました。この一行が草津宿本陣に残る大福帳の棹尾に記されています。

和宮をはじめ姫宮たちの草津宿の通行は、その実態が資料不足により十分解明されていません。通行は、草津宿１宿に限ったものではなく、街道にあった宿場で連続して見られるものであることから、今後、東海道をはじめ中山道の他宿との比較研究を進めていくことが大切であると考えられます。

滋賀文化財教室シリーズ　No.203号
発行年月日　2002年12月25日
編集・発行　財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525